

第二神殿時代ユダヤ教の多様な聖書解釈[※]
—クムラン共同体における天使との共同の意識について—

大 澤 香

**Diverse Interpretations of the Bible in Judaism of the Second Temple Period:
The Qumran Community's Conception of Cooperation with Angels**

OZAWA Kaori

神戸女学院大学 文学部 総合文化学科 専任講師
連絡先：大澤 香 ozawa@mail.kobe-c.ac.jp

※本稿における死海文書の写本・断片・欄・行の番号表記は *Discoveries in the Judaean Desert* (1955-) に準ずる。聖書（外典・偽典を含む）、ヨセフス、フィロン、ユダヤ文献等の主要テキストの略記は、*The SBL Handbook of Style* (1999) に準ずる。

要 旨

本稿では、多様な聖書解釈を生みだした土壌として、第二神殿時代の多様な分派状況に注目する。特に、クムラン共同体に見られる天使との共同の意識について分析し、イエス及び新約聖書へ与えた間接的・逆説的影響を考察する。天使との共同の意識は、エルサレムの神殿体制に異議を唱えたクムラン共同体の正統性を支えるものであったことが考えられる。共同体での独身制の実践や、閉鎖的に守られた共同の食卓にも、天使との類似・共同の認識が関係していることが考えられる。イエスは、当時のユダヤ人によって食事の交わりから排除された人々が招き入れられる食卓の姿を通して、「神の国」の姿を示した。福音書文学（特にルカ福音書）は、このイエスのメッセージを効果的に「読者」に伝えるために、天使の描写を取り入れている可能性がある。

キーワード：聖書解釈、クムラン共同体、天使

Abstract

This study focuses on the Second Temple period during which diverse interpretations of the Bible emerged. In particular, this paper deals with the Qumran community's conception of cooperation with angels and the indirect and paradoxical effects this conception might have had on Jesus and the New Testament. Their conception of cooperation with angels seems to have supported the legitimacy of the community whose members resisted the Temple power in Jerusalem. Their practice of celibacy or closed table fellowship can be understood in the context of their conception of similarity/cooperation with angels. Jesus showed people "the kingdom of God" through his table fellowship which was open to those who were excluded from the table fellowship of the contemporary Jews. The gospel literature (especially Luke) might have depicted angels in the Jesus story in order to introduce Jesus' message to readers effectively.

Keywords: interpretations of the Bible, Qumran community, angel

はじめに

Marianne Grohmann は、ユダヤ教のラビ的解釈伝統の特徴として、聖なるものとしての効力を持つ子音テキストの普遍性を前提として、母音付加の様々な可能性と戯れつつ多様な解釈を行う点を挙げ、「トーラーには70の顔がある」¹⁾と言われるように、ヘブライ語聖書が持つ多様な解釈の可能性は、常に新しく再構成され得ると指摘する²⁾。

ユダヤ教の聖書解釈の多様性の伝統は、バビロン捕囚からの帰還後、再建された神殿とトーラーを柱として宗教的改革が行われた第二神殿時代に遡ることができるだろう³⁾。第二神殿時代の中でも特に、ヘレニズム化の影響を受けた神殿体制に対抗して生まれた多様な分派的集団の存在が、多様な聖書解釈を生み出す土壌となったと考えられる。

本稿では特に、新約聖書の背景である紀元1世紀前後のユダヤ教の中に存在していた数多くの分派的集団の内、エッセネ派と関係が深いと考えられるクムラン共同体の聖書解釈に見られる天使との共同の意識について分析し、イエス及び新約聖書へ与えた間接的・逆説的影響を考察する。この問題を整理することで、今後、歴史批評的方法の補完的視点として、「内包された読者」⁴⁾への新約聖書テキストの作用を研究する足がかりとしたい。

1. 第二神殿時代ユダヤ教の諸分派とイエス

1.1 分派形成の概要

以下に、後1世紀のユダヤの主要な諸分派について、分派相互の関連を意識しながら概要を述べる。

捕囚からの帰還後も、ユダヤはアケメネス朝ペルシアの支配下にあったが、前334年にアレクサンドロス大王がペルシアを征服した後は、ユダヤもヘレニズム国家の支配下に入る。前3世紀の約100年間は、プトレマイオス朝エジプトの支配を受けるが、前2世紀になるとセレウコス朝シリアの支配体制となる。前175年にギリシャ文化の信奉者アンティオコス4世エピファネスがシリア王となると、ユダヤ人へのギリシャ文化の強要や、エルサレム神殿からの略奪が行われた。これに反対したハスモン家の祭司マタティアが、前167年にシリアに対する戦い（マカバイ戦争）を開始した。この時、マタティアを支援して抵抗運動を行った人々は「ハシディーム（敬虔な者たち）」と呼ばれた⁵⁾。戦いは子のユダ・マカバイに引き継がれ、前164

1) *Num. Rab.* Naso 13, 15.

2) Grohmann, “Rezeption und Übersetzung.” 13-30参照。Grohmann の論文についてより詳しくは、拙稿（大澤「聖書の受容・解釈・翻訳」87-91頁）を参照。

3) 死海文書の発見により、聖書本文に関しても、未だ多様な本文が存在していたことが明らかになった。Emanuel Tov は「逆説的だがモーセ五書への関心の高まりが紀元前最後の数世紀間に多種多様な本文形式の創出に寄与した」と指摘する。Tov, “The Scribal and Textual Transmission,” 58（トーフ「聖性という観点から分析したモーセ五書の筆写・本文伝達」108頁）参照。

4) イーザー『行為としての読書』45-66頁、参照。

5) 1 Macc 2:42-44, 7:12-17; 2 Macc 14:6.

年12月、神殿を奪還して穢れを清め、奉獻祭（ハヌカ）を行う。ローマと同盟を結んだユダの死後、兄弟のシモンが指導者の時に、同じ祭司階級に特権を与えたためにハシディームが分裂し、いくつかの分派が誕生した。シモンの暗殺後、息子のヨハネ・ヒュルカノス1世によってハスモン王朝の世襲体制が確立する。しかしハスモン家が伝統的な大祭司の家系（ツァドク系）でもダビデの家系でもなかったため、その聖性も疑問視された。

マカバイ戦争後のハシディームの分裂が、その後の分派発生の要因の一つとなったと考えられる。以下にヨセフスが言及している4つの主要な分派の形成の経緯と特徴をまとめる⁶⁾。

①エッセネ派

新約聖書では直接言及されていないが、死海文書の発見により、内部の組織や思想について多くの情報が明らかになった。恐らく前150年前後に、ハスモン家がツァドク系ではない血統から大祭司を任命したことによって、自分たちの権威が奪われたと考えた敬虔なユダヤ人たちが、クムランでの共同体生活を始めたようである⁷⁾。彼らは荒野の共同体においてモーセの律法を厳格に守り、自分たちの儀礼的純粋さを維持しようとした。そこには、終末の時が差し迫っているとの確信があった。その時が来ると、善と悪の、すなわち光の子らと闇の子らとの最後の戦いが起こると考えられた。そして戦いは神の勝利に終わり、神の子らは祝福された王国に入れられると信じられた。

終末までの間、エルサレム神殿や他のユダヤ人たちを含むこの世の不浄から離れるため、彼らは、厳格な入会規則を持つ修道院のような共同体生活を始めた。入会までには2年の待機期間があり、その後認められれば、その人はすべての所有を共同体に寄進し、他の共同体員との共同の食事に与かった。

クムラン共同体は、エルサレムのサドカイ派に対して、モーセ律法を汚す悪しき祭司たちだと非難し、同時にトーラーに対して新しい解釈を行うファリサイ派を「滑らかなものを求める者たち (חלקיהם)」と批判した⁸⁾。

ユダヤ戦争（後66-73年）が始まった時、エッセネ派は、戦いに参加する前に聖なる文書の一部を隠したようである。彼らがこの戦いを、終末に先立つ最終戦争と考えた可能性は十分に考えられる。エッセネ派の中では、差し迫った終末の意識から独身主義を選ぶ者もいたようである⁹⁾。

6) Ehrman, *The New Testament*, 72-78; Brown, *An Introduction*, 74-83参照。ただし、Brownは①今日でも明確な宗教的アイデンティティを持たない者も多くいるように、ヨセフスの挙げる分派の区別は、当時の多くのユダヤ人にとって重要でなかった点、②分派間の違いは純粋に宗教的なものというよりも、より広い視野で捉えるべきこと、③指摘されている区別は非常に限定されており、他にも多くの推測が可能であること、④ヨセフスはローマの読者に対して単純化して報告しているので、実際の各集団の具体的な思想を知ることが困難であること、に注意を促す (Brown, *Introduction*, 76)。

7) *Ant.* 18:19.

8) 4Q169 (4QpNah) 3-4 i 7; CD-A 1:18. Brown, *Introduction*, 78参照。

9) エッセネ派の独身主義と天使との共同の意識については、本稿の後半で考察する。

②サドカイ派

再構築が非常に困難なグループである。その理由は、サドカイ派の手による文献が残されていないことにある。ハシディームの分裂後も体制側についた主に祭司層の人々で、イエスの時代には、少数派でありながらも、パレスチナのユダヤ教の貴族政治の担い手として実権を握っていた人々である。貴族・祭司・大土地所有者が多く、サンヘドリンは主にサドカイ派によって構成されていた。

政治のメンバーとしてローマから特権を与えられたため、世俗の権威に対して懐柔的であったようである。保守的な性格が強く、礼拝や律法に変更を加えない。モーセ五書のみを権威あるテキストとし、ファリサイ派によって形成された口伝律法は認めなかった¹⁰⁾。天使の存在と死者の復活についても認めなかった。日常生活の基準についてはあまり関心がなく、神殿に近い立場として、神殿での犠牲儀礼の重要性を強調し、自分たちの立場維持のためにローマと良好な関係を維持することに力を注いだ。70年のエルサレム神殿破壊と共に消滅したと言われる。

③ファリサイ派

マカバイ戦争の際のハシディームの分裂後に祭司以外の信者や律法学者によって結成された分派である。イエス時代の分派の中では最多数の集団であり、民衆の間で影響力を持っていた。敬虔なユダヤ人グループで、可能な限り自分たちの神の律法に従うことを主張した。モーセの律法を日常の生活の中で遵守するには、律法の意味の曖昧な箇所を、時代に合わせて具体的に再解釈する必要がある。モーセ律法を守るために設定された具体的な規則や基準が口伝律法として伝えられ、それらは後にミシュナとして書き記された。70年の神殿破壊後もヤブネに移住して生き延び、今日のラビ・ユダヤ教に繋がっている。

分派名は恐らくヘブライ語で「分離」を意味する **שִׁפְרוּ** に由来し、俗世や異教的なものからの分離を目指した。しかしそれは相対的な分離であって、完全な分離ではなかった。同士の中では「ハベリーム（仲間たち）」と呼んだ。ファリサイ派はイエスの時代には、比較的閉鎖的なグループを形成していたようで、仲間内のみでの食事や交流を行った。黙示思想によって、律法を遵守する者が永遠の命に入れられると信じ、それゆえに律法を守ろうとした。

④シカリ派、ゼーロータイ（熱心党）

ヨセフスは特定の呼称を記さず、「第4の哲学」と述べている¹¹⁾。ハシディームの分裂時にはファリサイ派と共にあったが、後6年のローマによる徴税を目的とする人口調査に反対したガリラヤのユダに率いられてファリサイ派から離れた¹²⁾。ローマに暴力的な犯行をし、ゲリラ的な反ローマ運動を行った¹³⁾。イエスの弟子に「熱心党のシモン」がいた¹⁴⁾。

10) *Ant.* 13:297-298.

11) *Ant.* 18:23-25. ヨセフスはローマの聴衆に対し、諸分派を「哲学」として紹介している。

12) *Ant.* 18:4-10; *J.W.* 2:118.

13) *Acts* 5:36-37; 21:38.

14) *Mark* 3:18; *Matt* 10:4; *Luke* 6:15; *Acts* 1:13.

1.2 分派と黙示論

上述の中で、サドカイ派以外の分派は黙示思想の影響下にあった。ペルシアの二元論の影響を受け、終末の時まで神への忠実を守って苦難を堪え、永遠の命に入れられることを信じた。

同じく黙示思想の影響下にあっても、ヨセフスの記述からは、「運命」に関する理解の相違が窺われる¹⁵⁾。ヨセフスの報告によると、サドカイ派が運命論を認めていなかったのに対し、ファリサイ派は部分的に運命論を認めていた。日常生活における律法遵守の度合いによって、ある人の善悪が人生の途上において決定されるとの認識に基づき、熱心に律法を遵守することで、終末における永遠の命の獲得を目指したことが考えられる。一方エッセネ派は運命による完全な予定を信じていたため、善人と悪人の区別も生まれる前から決定済みであり、律法遵守については単に善人にふさわしい生活と考えた¹⁶⁾。

2. クムラン共同体における天使との共同の意識

2.1 クムラン共同体における天使の描写

死海文書には、天で神の傍にいる天的存在への信仰が見られ、そこには、クムラン共同体が天使との共同の意識を持っていたことが窺える¹⁷⁾。1Q28b (1QSb: *Rule of the Blessings*) のテキストからは、共同体がいつの日か天使たちの交わりに入れられるとの信念を見ることができ。特に祭司たちは「御前の天使たち (מלאך פנים)」と共に未来の神殿で奉仕する姿が構想されている¹⁸⁾。

…あなたが聖なる住まいにおける御前の天使として、万軍の神の栄光に対して (永遠にとどまりますように)。[あなたが永遠に神に仕え、] 王国の神殿においてあらゆる点で奉仕しますように。御前の天使たち及び [聖なる者たちと共にある] ヤハド¹⁹⁾の集会と永遠に共にある運命を律しながら。永遠に続くすべての時代に渡って! … (1Q28b [1QSb] 4: 24-26)

4Q491 (4QM [ilhamah]^a) 11 i 8-24は天使たち (אליים) と共に数えられ、聖なる集まりの中に留まる人物について言及され (14行)、天使たちと共にいる義人たちについて言及している (20行)。4Q511 (4QShir^b) Frg. 35では、神が邪悪な者たちを滅ぼす一方で、聖なる者たち

15) *Ant.* 13:171-173; *J. W.* 2:162-165.

16) 飯『R100b 講義予稿』32頁より示唆を受けた。

17) 1QS 11:8; 1Q28b (1QSb) 1:5; 4Q511 Frg. 2 i 8; Frg. 8 8-9; Frg. 10 11-12. 1QH^a 3:32をも参照。(Fletcher-Louis, *Luke-Acts*, 185)。Fletcher-Louisの研究の中で、天使論の新約聖書学への適用の仕方には、執筆者が異論を持つ点も存在する。この点は、別稿にて扱う。

18) Wise, *The Dead Sea Scrolls*, 141.

19) Rachel Elijor は、クムラン共同体が自分たちのことを指して呼んだ「ヤハド (共同体)」とは、「祭司たちと天使たちの共同」を反映した名前であると考えられると指摘する (Elijor, *Three Temples*, 170)。1QH^a (Thanksgiving Hymns^a) 11:21-23; 14:10-16をも参照。4Q285 (4QSefer ha-Milhamah) 8 3-10等には、秘儀の礼拝に参加している共同体の中の天使たちの存在が述べられている (Elijor, *Three Temples*, 172)。

を聖別することが述べられている。

…しかし神は聖なる者たちの内のある者たちをご自身のために永遠の聖所として聖別するだろう。…そして彼らは祭司となり、神の義なる人々となり、神の軍勢となり、聖職者、神の栄光ある天使となるだろう。(2-4行)

この箇所からは、「天使」と同一視されている祭司的な人々が、「聖なる人々 (קדושים)」の中から選ばれて聖別されていることが分かる。ここに、エッセネ派の中に、祭司としてより聖性を守って生活をしたグループと、より緩やかなトーラーの実践をした残りのグループが存在していた事態を見る可能性も示唆されている²⁰⁾。

死海文書の中の多くの偽典文書の中にも天使との共同を描くものが多いことも、共同体の意識の傍証とされ得よう。ヨベル書は、天使たちを、天において安息日を遵守する安息日の守護者として描き、神の選びの民イスラエルが、天使たちと共に安息日を守ることを述べる²¹⁾。

2.2 天使との共同の意義

前述のようなクムラン共同体の祭司と天使との共同の意識の背後には、宇宙の秩序維持のために永遠に専従である天使たちと結合されつつ、祭司制もまた先天的な世襲によって専従であるとの主張があると考えられる²²⁾。これは1.1で見たように、当時のエルサレム神殿体制と大祭司の聖性に異議を唱えたエッセネ派の主張である。Elior は「安息日の犠牲の歌」を通して、祭司の責務を果たすことを禁じられた、神殿を失った祭司たちが、この状況を埋め合わせるかのように、天使たちと共に歌い詠唱し、彼らの歌と神話、天使たちによって啓示され祭司たちによって守られた暦などによって、天と地の間の隔たりを架橋することに熱心であったことを指摘する²³⁾。

クムランから多くの写本が発見されたエノク書では、神のところに取られたエノクに天使が秘儀を教え²⁴⁾、義人エノクは書記・祭司・天使の性質によって描かれながら、太陽暦の証人とされる²⁵⁾。

20) Fletcher-Louis, *Luke-Acts*, 192. 祭司と天使との対応は、*Jub.* 30:18; 4Q400 1 i 3-5にも見られる。Mal 2:7の「彼(祭司)こそ万軍の主の使者(天使)である」も参照。

21) ヨベル書において天使たちは安息日と割礼を守り、イスラエルがトーラーの聖性を守る姿と対応していると考えられる (*Jub.* 2:17-22, 30; 15:27)。 *Jub.* 31:13-15は特にレビとその子孫について語る。

22) Elior, *Three Temples*, 176.

23) Elior, *Three Temples*, 169-170.

24) *1 En.* 33:3-4; *1 En.* 75:2-3; *1 En.* 82:6-7; *2 En.* 22:10-23:2.

25) 4Q227 (4QpsJub^s) Frg. 2; 11Q12 (11QJub) Frg. 4参照。天によって根拠づけられていると主張される太陽暦は、太陰暦を採用するエルサレム神殿体制に対して、クムラン共同体で採用されていた暦であった。

3. 天使との共同の意識と禁欲主義の関係

1.2で確認したように、天使の存在や復活を認めないサドカイ派以外の諸分派は皆、黙示思想の影響下にあった。ファリサイ派にも「分離」の傾向は見られたが、外部（汚れ）から離れて自分たちの聖性を保とうとする態度は、クムラン共同体（エッセネ派）において最も徹底している。このクムラン共同体のメンバーに天使との共同の意識が見られることを2章で確認した。ここでは、天使との共同の意識と、共同体の中に見られる禁欲主義の関係を考察する。しばしばクムラン共同体の特徴として挙げられる、独身主義や食卓の聖性が、天使との共同の意識と関連している可能性が考えられる。

3.1 独身主義

ヨセフスの記述によると、エッセネ派は独身制を守る者とそうではない者に分かれていたことが窺われる²⁶⁾。ヨセフスのこの記述を確認するものとして CD 6:11-7:8を指摘する Baumgarten (1990) と Qimron (1992) の説を取り上げながら、Fletcher-Louis は、2.1で4Q511 Frg. 35に確認されたような、エッセネ派の中より厳格に聖性を守るグループと、独身制を守る者たちの関連を述べる。そして CD 7:6で語られている厳格に掟を守る人々には「幾千代にも及ぶ命が与えられる」との記述が、独身制を守る人々が子孫の継続を案じる必要がないことを意味していると指摘する²⁷⁾。

Seim は、「人間の通常の活動—食べること、飲むこと、結婚における出産—に関する禁欲的な拒否に光を投じる概念」として、ユダヤ文献に見られる天使との類似性の概念を報告している²⁸⁾。『アダムとエバの生涯』等では、食べること、飲むこと、子どもを産むことが、人間の「動物的な」側面に属することであることを示すものと解釈されており、アダムとエバは、樂園での原初的な状態ではそのような物質的な必要はなかったが²⁹⁾、墮罪後、アダムとエバは死ぬべきものとなり、死すべき体は地上の食べ物と飲み物を必要とし、また、その死ぬべき運命を克服するために子どもを産まなければならなくなった。このような理解の中で、人間が神の似姿において創造されたという概念が、しばしば天使との類似性の概念を仲介として、教義的な用語において書き記され、人間が天使に特有の性質を所有し、天使が持っている命のような永遠の命を勝ち取ることができるとの認識につながると指摘される³⁰⁾。

26) *J. W.* 2:119-121, 160-161.

27) Fletcher-Louis, *Luke-Acts*, 194. CD 7:6の直後に、それらの人々とは別の「地上の掟に従って陣営で暮らし、女性と結婚して子供をもうける人々」について言及されている。

28) Seim, *Message*, 210.

29) アダムが創造の時に受け取った体は、生ける体であり、彼は「天使たちの食べ物」によって、あるいは全く食べなくても、生きることができた (*L.A.E.* 4)。

30) Seim, *Message*, 211. Seim は、このような概念が当時のユダヤ教においては一般的とは言えなかったことを指摘する。黙示的・ラビの文献においてより一般的であったのは、復活後の天での命が、地上の祝福された命のより強調されたもの（良い食べ物と飲み物が豊富にあり、女性は陣痛なしで毎日子どもを産む）との理解であった。霊的で禁欲主義的な変形は、4エズラ書と2バルク書（シリア語バルク黙示録）に初めて現れ、後のラビ文献では律法を守ることへの要求を支えるものとして述べられていることが指摘されている (Seim, *Message*, 212)。Luke 20:34-36をも参照。

3.2 天使の食べ物

Seim の報告が、食べること、飲むこと、結婚による出産に関する禁欲が天使との類似性の概念と関連していることを述べるように、Fletcher-Louis は、天使が食べないこと（少なくとも地上の食べ物を食べないこと）が当時のユダヤにおいて広く認識された「トボス」であったと述べ³¹⁾、以下のミドラシュのモーセの断食の記述を指摘する³²⁾。

…天、そこには食べるということは存在しない、モーセは天に昇った時、彼ら〔天使たち〕のようにふるまった。わたしは四十日四十夜、その山に留まり、パンも食べず水も飲まなかった (Deut 9:9)。 (*Gen. Rab.* 48:14³³⁾)

また LXX の Ps 77:25 (MT 78:25) は、荒野で天からイスラエルに与えられたマナについて「天使たちのパン (ἄρτον ἀγγέλων)」と言われている³⁴⁾。

ユダヤ文献以外にも多くの異教徒著作家たちが、ユダヤ人はユダヤ人以外とは通常共に食事をしないことを報告しており、それは異教礼拝との関係を避けるためであったと考えられるが、それは遅くとも前2世紀から続く実践であったと考えられる³⁵⁾。これまで見てきたように、この時期、天使の特別の食べ物についての概念や、天使との類似の認識が存在していたことから、異邦人と食卓を共にしない実践の背後に、天使との共同の概念が関係していること、あるいはそれらの実践と概念の発展の過程で、相互の関連が生じていることが考えられるのではないだろうか。

3.3 クムラン共同体の食卓の交わり

フィロン³⁶⁾ やヨセフス³⁷⁾ の記述からは、エッセネ派の共同の食事の特殊性が窺われる³⁸⁾。

31) Fletcher-Louis, *Luke-Acts*, 64. Judg 6; 13; Tob 12:19等。 *Apoc. Ab.* 13をも参照。聖書の中の天使が食べているような記述 (Gen 18-19; Tob 3:16-12:22) については、遅くとも前2世紀には、Tob 12:19等に見られるように、実際には食べていないとの解釈がなされている。Gen 18-19についても、Philo (*Abraham* 118); *Targum Neofiti*; Josephus (*Ant.* 1:197); *T. Ab.* 4:10等に同様の解釈が窺われる (Fletcher-Louis, *Luke-Acts*, 68)。Fletcher-Louis は、Luke 24:31-38で復活のイエスが魚を食べる姿において、この天使の性質を否定している点に関し、イエスについてのドケティズムの理解を否定する意図があったことを示唆している (Fletcher-Louis, *Luke-Acts*, 69)。

32) Philo (*Dreams* 1:36)、Josephus (*Ant.* 3:99) にも類似の認識が窺われる (Fletcher-Louis, *Luke-Acts*, 65)。

33) *Midrash Rabbah: Genesis* より翻訳して引用。

34) MT では「力ある方のパン (לֶחֶם אֱבִירִים)」。*Jos. Asen.* 16:8をも参照。『ヨセフとアセナテ』において、天使がパンとブドウ酒を飲まないが、天使の食べ物として「蜂の巣」を要求することが述べられている。Fletcher-Louis は、この文書がヘレニズム化したユダヤ文化の産物であることと、蜂蜜を神々の食物と考える異教文化の伝統の関連を示唆する。Philo (*Hypothetica* 11:8) エッセネ派の蜂を飼う人々を報告していることも傍証として報告している (Fletcher-Louis, *Luke-Acts*, 67)。洗礼者ヨハネは「いなごと野蜜を食べていた」と言われる (Mark 1:6)。

35) Dan 1:8; Tob 1:10-11; *Jub.* 22:16; *Jdt* 12:2, 19.

36) Philo, *Good Person* 86.

37) *J. W.* 2:129-133, 138-139, 143, 152-153.

38) 1QS 6:2-11の記述は、フィロン、ヨセフスの報告に合致する。

(エッセネびとの) 神的なものへの敬虔は独特なものである。彼らは太陽が昇る前には世俗的な事柄についてはいっさい口にせず、太陽が昇るのを祈願するかのように、それに向かって父祖伝来の祈りをささげる。この後、監督者たちによって解散させられると、各自は習熟した手仕事に向かい、第五時まで労働に専念し、その時間になると再び一箇所に集合する。このときは亜麻布の腰布をつけて、冷水で体を洗い潔める。この潔めの後、彼らは一緒になって個室に入るが、他の見解をもつ者はそこへの入室を禁じられている。彼ら自身は今や身を潔められているので、あたかも聖なる神域に入っていかのようにして食堂に向かう。彼らが沈黙のうちに着席すると、パンを焼く者が年上の者から順にパンを配り、料理人はひと皿だけの肉料理を各自に配る。祭司が食事の前に祈祷するが、祈りの前に食べることは禁じられている。朝食が終わると、祭司は再び祈りをささげる。食事の始めと終わりに、命の与え手である恵み深き神に賛美をささげる。ついでその衣を、聖なるものなので、傍らに置くと、夕方まで再び労働に打ち込む。(J. W. 2:128-131³⁹⁾)

Dunn は、エッセネ派の食卓の交わりに適用される清浄規定が、「共同体の周りの境界」として機能した⁴⁰⁾のみならず、ファリサイ派におけるよりも一層厳格な清浄規定の遵守を求める「内なる境界」として機能していたと指摘する⁴¹⁾。IQS (*Rule of the Community*) には、入会希望者が一般の共同体員の清い食べ物 (טְהוּרַת הַרְבִּיּוֹת) に触れることができるようになるまで一年の期間を要し (6:16-17)、更に共同体の中で二年目が過ぎるまで、一般の共同体員の飲み物に触れることができなかった (6:20-21)とあり、その後適格者と認められた場合に、清い食事への参加を含め、完全な共同体員としての資格が与えられたことが窺われる (6:21-22)。IQ28a (IQSa: *Rule of the Congregation*) 2:3-10、IQM (*War Scroll*) 7:4-6、CD (*Damascus Document*) 15:15-17には、共同体の閉鎖的性質と共に「聖なる天使たち」との共同が言及されている。恐らく共同体は、神殿の清さを示し維持するものとして、その中心に神と彼の聖なる天使たちが住む共同体として、自分たちを見ている⁴²⁾。

4. イエスの食卓のメッセージ

Seim らの報告から、イエスの同時代のユダヤ教の中に、「食べること」や「飲むこと」が、天使とは対照的な死ぬべき人間の行為であるとの認識があったことを確認した。同時代のこの認識を新約聖書も知っていることが、いくつかの箇所から窺われる⁴³⁾。その一方で、イエスは

39) ヨセフス『ユダヤ戦記1』より引用。

40) 「不義の人々」からの分離と契約への献身についてはIQS 5:10-11等を参照。

41) Dunn, "Jesus, Table-Fellowship," 262. エッセネ派はファリサイ派の食事の姿を批判していると考えられる。エッセネ派とファリサイ派両グループは、日々の食事において、神殿とその勤めに要求される清さの水準を維持しようとした点で対応している。しかし、エッセネ派の場合は、特にクムランの閉鎖的共同体において、清さの基準と境界が強化され、共同体の清さがより堅固に統制され守られた (Dunn, "Jesus, Table-Fellowship," 263-264)。

42) Dunn, "Jesus, Table-Fellowship," 264. 身体的な傷を含むすべての汚れの追放が一貫して主張されている。Lev 21:17-24をも参照。

43) Luke 17:26-30; 1 Cor 15:32, etc.

同時代のこの認識とは別の姿を提示している。福音書の記述の中で、「食べる (ἐσθίω)」と「飲む (πίνω)」をキーワードとして見ていくと、エッセネ派との深い関係が考えられる洗礼者ヨハネと、当初はそのヨハネの弟子になったと考えられるイエスの間の大きな違いを見ることが出来る。

Matt 11:18-19 (Luke 7:33-34) 「…ヨハネが来て、食べも飲みもしないでいると、『あれは悪霊に取りつかれている』と言ひ、人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。」

Luke 5:30-33 ファリサイ派の人々やその派の律法学者たちはつぶやいて、イエスの弟子たちに言った。「なぜ、あなたたちは、徴税人や罪人などと一緒に飲んだり食べたりするのか。」…人々はイエスに言った。「ヨハネの弟子たちは度々断食し、祈りをし、ファリサイ派の弟子たちも同じようにしています。しかし、あなたの弟子たちは飲んだり食べたりしています。」

Matt 6:25-32 (Luke 12:29-30) 「…自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。…だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思ひ悩むな。…あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。」

これらの箇所からは、ヨハネとその弟子たちには断食の習慣があったのに対し、イエスとその弟子たちの特徴は、禁欲的行為とは逆の飲食に関する自由な態度として記されていることが窺われる。そしてイエスと弟子たちの飲食への自由な態度は、イエスの食卓が閉鎖的でないこと、すなわち「徴税人や罪人たち⁴⁴⁾」と食卓を共にするという姿をもって特徴づけられている⁴⁵⁾。イエスにおいてはこのことが、ファリサイ派や律法学者たちの非難の対象であった⁴⁶⁾一方で、イエスの側からはファリサイ派のような排他的な食卓への批判があったことが考えられる⁴⁷⁾。

44) 1 En. 1:1, 7-9; 5:6-7; 82:4-7; Pss. Sol. 3; 13; 15, etc. 「罪人」の用語は、ユダヤ人によって同じくユダヤ人に関して使われた。分派の成員から、何が敬虔なユダヤ人として容認できない行為とみなされるのかを表すために用いられた (Dunn, "Jesus, Table-Fellowship," 259)。

45) 罪人や徴税人との食事の箇所として他に Mark 2:15-16 pars.; Luke 15:2; 19:7、病人との食事の箇所として Mark 14:3 pars. がある。またイエスはファリサイ派とも食事をしている (Luke 11:37; 14:1)。Luke 10:5-9にも、共に食事をする相手を選ばない姿勢が示されている。

46) Mark 2:16 pars.; 7:1.

47) Luke 13:26からは、地上で共に食事をするのが、救いの時の特権的身分につながっているとの認識への非難が窺われる。Matt 11:18-19及び Luke 7:33-34で、ファリサイ派は自分たちの閉鎖的食卓と理論を同じくするはずのヨハネの断食を「悪霊に取りつかれている」と批判する一方で、断食しないイエスを批判している。

エッセネ派の食卓の実践とも異なり⁴⁸⁾、ファリサイ派とも極めて異なる理解において、イエスの食卓は、当時のユダヤ人が自らの聖性を確保するために共同の食事から排除した人々こそが「神の国」に招かれることを示す、明確なメッセージであった。

5. まとめ

本稿では、第二神殿時代のユダヤ教における多様な分派の形成過程とそれぞれの分派の特徴を概観し、その中でも特にエッセネ派と関係が深いクムラン共同体に見られる天使との共同の意識について考察した。エルサレムの神殿体制に異議を唱えて荒野での共同生活を行ったクムラン共同体の正統性と聖性の根拠として、天使との共同の意識があったことが考えられる。またクムラン共同体の中でもより厳格に聖性を維持した人々による独身制の実践や、共同体の完全なメンバーのみによって閉鎖的に守られた共同の食卓にも、同時代のユダヤ教にも見られる天使との類似に関する認識が関係していることが考えられる。この認識は、エッセネ派ほどに厳密な律法遵守ではないが、終末における永遠の命の獲得のために、自らを聖とし他者を排除する閉鎖的な食卓を自己同一化の手段とした、ファリサイ派などのユダヤ人の認識とも関連していることが考えられる。

これらユダヤ人が自らの救いの象徴・手段として極めて重視した共同の食事を、彼らとは非常に異なる理解において、「神の国」の姿として提示したのがイエスであった。その姿は、自らの救いを求める人々が排除した人々こそが招き入れられる共同の食卓の姿によって示されたのであった。

本稿では、特に死海文書に見られる天使の概念に焦点を当てたが、死海文書と同時代の書物と言える新約聖書の中にも天使は登場する。福音書における天使の描写を見る時、天使が登場するのは、特にイエスの誕生にまつわる場面や、イエスの復活後の描写⁴⁹⁾においてであり、イエス物語の枠の部分に多いことに気付く。このことは、イエスの物語を記す著者たちが、イエス物語を効果的に語るために天使を登場させている可能性がある、ということの意味している。福音書の「枠」に天使を登場させる効果とは何か。死海文書において、天使はクムラン共同体の正統性の主張を支える機能を持っていた。死海文書が天使にそのような機能を担わせていたことを視野に入れる時、排除された人々が神の国に招き入れられることを告げたイエスの物語を、天使によって枠づけた福音書文学に、同時代のユダヤ教諸分派の主張に対する抵抗文学としての主張を見ることができないのではないだろうか。

48) Dunn は、Luke 14:12-21で、死海文書に従って共同体の食事から追放された人々が、イエス伝承では、食卓の交わりに招かれるべき人々として挙げられていることに言及し、エッセネ派の排他的な食卓の交わりへの批判である可能性を指摘する (Dunn, "Jesus, Table-Fellowship," 266-267)。

49) この傾向は特にルカにおいて顕著である。ルカ福音書で登場人物として直接天使が登場するのは、イエスの誕生物語の Luke 1-2と、復活の場面の Luke 24:4 (ただしここでは「輝く衣を着た二人の人」となっており、24:23でそれが天使であったことが述べられる) のみである。Luke 22:43-44は後代の加筆と考えられる。またルカは Mark 1:12-13の荒野での誘惑の場面の描写から、「天使たちが仕えていた」の部分削除している (Luke 4:1-12. cf. Matt 4:1-11)。ルカの描写についての詳しい分析は、別稿にて行う。

(主要参考文献)

テキスト

- Discoveries in the Judaean Desert*. 39 vols. Oxford: Clarendon Press, 1955-.
- The Dead Sea Scrolls Reader*. 2 vols. 2nd ed. Revised and Expanded. Edited by, Donald W. Parry and Emanuel Tov in association with Geraldine I. Clements. Leiden: Brill, 2014.
- Midrash Rabbah: Genesis*. vol. 1. Translated by H. Freedman. New York: The Soncino Press, 1983.
- The Old Testament Pseudepigrapha*. vol. 1: Apocalyptic Literature and Testaments. Edited by James H. Charlesworth. New York: Doubleday, 1983.
- The Old Testament Pseudepigrapha*. vol. 2: Expansions of the “Old testament” and Legends, Wisdom and Philosophical Literature, Prayers, Psalms, and Odes, Fragments of Lost Judeo-Hellenistic Works. Edited by James H. Charlesworth. New York: Doubleday, 1985.
- フラウイウス・ヨセフス『ユダヤ戦記1』秦剛平訳、筑摩書房、2008（2002）年。

参考文献

- Alexander, Patrick H., John F. Kutsko, James D. Ernest, Shirley Decker-Lucke, and, for the SBL, David L. Petersen, eds. *The SBL Handbook of Style: For Ancient Near Eastern, Biblical, and Early Christian Studies*. Peabody: Hendrickson Publishers, 1999.
- Brown, Raymond E. *An Introduction to the New Testament*. The Anchor Yale Bible Reference Library. New Haven: Yale University Press, 1997.
- Dunn, James D. G. “Jesus, Table-Fellowship, and Qumran.” Pages 254-272 in *Jesus and the Dead Sea Scrolls*. The Anchor Bible reference library. New York: Doubleday, 1993.
- Ehrman, Bart D. *The New Testament: A Historical Introduction to the Early Christian Writings*. 6th ed. Oxford: Oxford University Press, 2016.
- Elior, R. *The Three Temples; On the Emergence of Jewish Mysticism*. Translated by David Louvish. Oxford: The Littman Library of Jewish Civilization, 2005.
- Fletcher-Louis, Crispin H. T. *Luke-Acts: Angels, Christology and Soteriology*. WUNT, 2/94. Tübingen: Mohr Siebeck, 1997.
- Grohmann, M. “Rezeption und Übersetzung. Jüdische und christliche Transformationen der Hebräischen Bibel.” Pages 13-30 in *Religion übersetzen: Übersetzung und Textrezeption als Transformationsphänomene von Religion*. Edited by M. Grohmann and U. Ragacs. Göttingen: V&R unipress, 2012.
- Seim, Turid Karlsen. *The Double Message: Patterns of Gender in Luke-Acts*. Edinburgh: T.&T. Clark, 1994.
- Tov, Emanuel. “The Scribal and Textual Transmission of the Torah Analyzed in Light of Its Sanctity.” Pages 57-72 in *Pentateuchal Traditions in the Late Second Temple Period, Proceedings of the International Workshop in Tokyo, August 28-31, 2007*. Edited by Akio Moriya and Gohei Hata. Leiden: Brill, 2012.
- Wise, Michael O., Martin G. Abegg Jr., and Edward M. Cook, eds. *The Dead Sea Scrolls: A New English Translation*. New York: Harper Collins Publishers, (rev.) 2005.
- W. イーザー『行為としての読書』饗田収訳、岩波書店、1982年。
- エマニュエル・トーヴ「聖性という観点から分析したモーセ五書の筆写・本文伝達」『古代世界におけるモーセ五書の伝承』京都大学学術出版会、2011年。
- 大澤 香「聖書の受容・解釈・翻訳—Marianne Grohmann の論考を手掛かりとして—」『New 聖書翻訳』第4号、日本聖書協会、2018年、87-91頁。

(原稿受理日 2018年9月10日)